

視 点

伝承論への新たな試み

—「説話・伝承学会」設立にむけて—

谷 口 広 之

昨秋、同志社大学で開催された説話文学会地方大会は多数の研究者、学生の参加によって盛況裡に幕を閉じたが、その会場で関西を中心にした新しい伝承研究会の会を切望する声が多く挙げられた。これを契機にして組織と活動をあらたにする学会の設立の気運が高まり、あけて一月十五日、立命館大学において設立準備会が催され、活動方針等の討議の結果、「説話・伝承学会」の名称をもって四月二十九日の設立大会及び第一回総会の開催が決定された。

従来、説話研究や伝承研究の分野には、説話文学会をはじめとして日本口承文学学会、伝承文学研究会などの組織があり、また国文学や民俗学などの領域でも説話や伝承の研究は、主要な分野のひとつを占め、そのために各大学、各地方に多様で相対的な研究組織が存在する。そのような状況のなかで、新しく

発足するこの学会の意義はどこにあるのか。また、この学会は伝承研究の分野においてどのような活動をめざすのか。それらの問題は実は伝承研究の今日性と深くかかわっている。

神話や説話や語りものなどのジャンルを扱う国文学の研究は、書承伝承、つまり書かれた説話を主として進められ、昔話や伝説などを対象とした民俗学の研究は、語られる説話に比重を置くという傾向が以前からあった。両者がどこでどう切り結びあうのか、そして書承も口承も含めて、それらを育み伝承してきた伝承社会の構造とはどのようなものかという総体としての視点が今要求されている。

そのためには、個別の研究領域に自らを閉じ込めることをせず、生きた生活伝承、歴史的な伝承時空に研究を解放し、広い視野とフィールドのなかにその方向性を求めていかなければならない。フィールドワークは民俗学の基本的方法であるが、たんなる踏査や採集ではなく、フィールドのなかに伝承を求め、フィールドのなかに伝承を意味づけようとする行為である。従って、説話・伝承学会は伝承研究を志す研究者だけの集団ではなく、いわゆる郷土史家、すなわち各地方で在地に根ざした調査研究を推し進めている在野の研究者の参加をも広く求める組織である。そして説話・伝承学会は定期の大会以外に、年一回

地方を開催地とする大会を持つ。伝承研究の蓄積された地に全国の研究者・郷土史家が集い、実際の民俗に触れることを通じて、各個の課題を深めていこうという構想である。初年度の地方大会は、伝承の地信州伊那谷、飯田市において開かれる。かつて柳田国男や折口信夫が熱く凝視した伝承の庫である。

フィールドワークが説話・伝承学会の方法的視点としての一方の軸であるとするならば、他方、グローバルな視野のもとに伝承をとらえることがもうひとつの軸である。従来からも、伝承研究はもちろんのことさまざまな文化領域において国際的な比較研究はおこなわれてきたが、フィールドワークを視点に据えた比較研究は必ずしも多いとはいえない。文字化された伝承のみならず、その後背地としての広々としたフィールドまでをも視野に収めなければ、比較研究はその価値を半減する。その意味で奄美・沖縄をはじめとする南西諸島は早くから注目を集めていたが、近年、朝鮮半島や東アジアを含めた広汎な比較文化論がとみに盛んであり、そのような視点をもつことがわれわれの伝承研究をより活発に豊かにしていくことは明らかである。

ちなみに、一月十五日に開かれた設立準備会は、講演会を同時に兼ねたが、講演者は、武田太郎伊那谷民俗文化研究所々長

(「伊那谷の原風景」、山下宏明名古屋大学助教授(叙事詩論をめぐって)、松前健立命館大学教授(韓国の巫女の祭りとその伝承))であった。武田氏の講演は、文字通りフィールドからの報告であり、伊那谷という風土が育んだ伝承を都との関連において論じられ、山下氏は中世の語りものを念頭においてヨーロッパのギリシャ以来の叙事詩の伝統との比較文学論的視点を展開され、また松前氏は韓国各地の实地踏査に基づいた多様なシャーマンたちの姿を紹介された。説話・伝承学会が今後めざそうとする方向が明示されていた講演会であった。

国文学、民俗学はいうに及ばず、歴史学、外国文学、民族学、文化人類学などの諸研究の成果にのっとった学際的な伝承をめざす学会として幅広い分野からの御参加を心より切望する。

なお、四月二十九日の設立大会及び第一回総会は、同志社大学において開催される。